

寝床屋の無料配布



・遣り手部屋にて
……
3

【金壺眼】 落ちくぼんで丸い目。怒った目つきや貪欲な目つきを言う。

〔精選版 日本国語大辞典〕

「花魁、手紙」

禿が襖を開ける前から、そう大声で呼ばわって入ってくる。が、座敷に花魁以外の人物がいることに気付いて、ピタリと口を閉じて入り口で固まる。

その顔が、いかにもへマをした、と言う思いを如実に語っていて、若旦那は思わずクスリと笑ってしまう。

「花魁、手紙だとサ」

三枚重ねの布団に早くも寝転んで煙管を吹かしながら、若旦那が揶揄うように声を掛ける。もう引けに近い刻限である。とは言え、まだ見世が閉まったわけでもない。ギリギリに飛び込んでくる客もいないことはない。

「コレサ、座敷に入ってからお言いなんし。茶屋への使いは済ませたのだろうね？」

膝の上に乗せていた三味線を壁へ立て掛けながら、遊女が禿を叱る。他の客が借り切つて居ても、「どうしても」、「顔をちよつと見るだけでいいから」、「ちよつとだけ、ホントちよつとだけだから」などと言う客の座敷に渋々と行つたものの、なんだかんだと随分引き止められて、ようよう帰つてきたばかりだ。

「……あい」

口をモゴモゴさせて、禿が答える。

「ハハア、許してやるがイイ。駄賃に飴玉を貰つたと見える。大方、一刻でも早く届けて返事をくれるとでも言われたのサ」

「ヤレヤレ、忙しないこと。若旦那にも相すまぬことでござりイす」

居続けの若旦那が貸し切つており、朋輩や芸者、幫間を呼んだ大仰な酒宴を張るわけでもないので、遊女は座敷へ行くときよりも気楽な着物を着ている。

「ナニ、見板を張る花魁だ。呼ぶ筋も多かるうよ」

若旦那の言葉に、遊女は手紙を受け取りながらちよこんと頭を下げる。そして、手紙に書かれた字を見て、ふつと頬を緩ませる。

「おや、険のある目つきの方が色つぱいと思つたが、優しいのも愛いじゃアないか。」

ムム、これは心中穏やかじゃアないね」

若旦那が揶揄うと、遊女は慌てて表情を消す。ニコリともしない高嶺の花というのが遊女の評判だが、本来は表情がコロコロ変わる女なのは、心を許した者の前でしか見せない顔だ。

「アノ……」

「ナニ、気にせずとも良い。ごゆっくり」

その様子を見て若旦那はそう言うのと、所在無げな禿をちよいちよいと手招きする。

「アイ、若旦那、ご用でござりますか」

「アア、済まないがまたお遣いを頼むよ」

「アイ」

禿は遊女の方を一瞬伺うように見て、遊女が大丈夫だと頷いてみせると、こくりと頷いた。

「台所へ行って、酒と肴を頼んでおくれ。これはお前への小遣いだ」
チャラ、と銭を握らせる。

「アイ、ただいま」

と禿が小遣いを大事に握りしめて座敷を出て行く。遊女も待ち兼ねたようにいそいそと手紙を開く。

「アノ……、若旦那……」

三度手紙を読んで、名残惜しいと言いたげに閉じた遊女が、ひどくしおらしい声で切り出す。

「アア、承知承知」

若旦那はばかりと輪を吹きながら、気楽に答えた。

引けの拍子木が妓楼に鳴り響く。

「駒栄こまへさん」

「まア、若旦那じゃありませんか」

遣り手であるお駒は自分にあてがわれた小さな座敷で茶を飲んでいた。駒栄はかつて自分が名乗っていた名前だ。若旦那がまだ少年で、彼の父親が駒栄の姉女郎の敵娼だった頃に知り合った。

「花魁が何か？」

「イヤなに。どうしてもって客が居たろう？ 思い入れワガママを言われたらしくてサ。偶にはゆっくり寝るがいいと、ちよいと抜けてきた」

若旦那の言葉に、まあまあ、と遣り手が困ったような顔をした。

「お優しいのは結構でございますがね、若旦那」

花魁を始め、妓楼の女たちはそれぞれの事情で抱えた借金を返すために働いている。そんな彼女たちを乱暴に扱う客がいけないわけではない。むしろ女たちに優しい客が妓楼にとつても有難い、いい客なのは間違いない。だが。例えばどんなに才に溢れ、綺麗な着物を着て、一人だけの座敷を与えられていても、結局は『春を鬻ぐ』^{ひき}のが勤め。花魁を甘やかすなど釘を刺そうとする遣り手の言葉を、若旦那もまあまあ、と制する。

「客の相手をするのが当たり前なのは、私も十分に承知サ。どうしてもと言う客がいる内が華だってことも」

遣り手は、ならどうしてと言いたい顔を隠そうともせず、それでも若旦那の言葉を待つ。

金払いは良い。女たちを始め、禿や遣り手、男衆、帳場や台所まで心付けを欠かさ

ない。優しすぎるほどの気配りが出来る、この妓楼の中でも五指に入る上客だ。そんな若旦那の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

「花魁、いや、あの人を何より大事にしたいからだと言ったら？」

若旦那が煙管をゆつくりと吸い付けて、一言そう言った。

「若旦那ほど優しい方もいらっしやいますまいよ」

楼の忘八に尻尾を降る駒婆アと陰口を叩かれることもある遣り手は、呆れたように溜め息を吐きながら、笑った。

「そうかな。私ほどの金壺眼かなつぽまなこはないと思うけれどね」

「おや、金壺眼ですって？ 若旦那ほど目元涼やかで、粹人はそうはおりませんでしょう。あの紀伊國屋だって、若旦那にや敵いませんよ」

お駒は袖で打つふりをする。

「おやおや、随分と買ってくれるね。だけど、駒栄さんには、いやお駒さんには誓つて言うけれど、本当のことだ」

お駒は若旦那の思い詰めたような顔を見て、茶化そうとした口が固まった。

「私はね、此花このはなを落籍ひかそうと思つているのサ」

そして、若旦那の言葉に魂消た。

「此花、でございますか」

お駒は慌てる。

此花はこの楼の見板、細見なら『入山に二ツ星』の最高位がつく。眉目秀麗、手跡も芸も並ぶ者はなく、房事も見事。当代一の仙女、傾城などと他の楼にも評判が響き渡るほどの遊女である。

花魁道中で練り歩けば、初心な浅葱裏が見惚れてフラフラと後をついて歩き、座敷で一節歌えば迦陵頻伽かと間違うような歌声に、耳が遠くなった老人がすっかり聞こえるようになった、などと言うヨタ話が実しやかに囁かれるほど。大門の外では此花の姿絵が女性たちに飛ぶように売られているらしい。彼女の使った簪や着物と同じものが流行り、流石に豪華奢侈を止めさせたいお上も度が過ぎるのではないか？ とお小言を垂れる名目で登楼するとかしらないとか。

当然かの遊女を望む客は引も切らない。更には年季が空ける前に、早く彼女を身請けしたいと言う客が、何人も内密に忘八に打診して来ていると言う噂が、実しやかに囁かれているほどだ。

この楼はそんな花魁、此花で持っていると言っても過言ではない。

そんな人気絶頂と言って良い女郎を、この楼の太客である若旦那が身請けすると言
う。

これは忘八、女将、そしてお駒しか知らないことだが、此花を身請けさせるなら、
とあるお大尽の後添えにしようと話していたのだ。

もちろん、その相手は目の前の若旦那ではない。

だが……。

「お駒さん。相手は誰だい」

「田佐木屋……」

はっと思ったが、もう遅かった。

「わ、若旦那……」

言い訳をしようか、なんと取り繕おうか。

実は、亡八は他の客とも争わせて、此花の身請け金を吊り上げようとしているのだ。

薬種問屋田佐木屋の主人は、若旦那に次ぐ太客で、此花にはちよつとどうかと思うく
らいに執着している。上手く言えば幾らでも金は釣り上げられる。此花と言う稼ぎ頭

を失う代わりに、たんまりと頂こうと言うのが亡八たちの企みだった。

遣り手は手を振り回し、若旦那をとにかく捕まえようとしたが、若旦那はそんな遣り手の様など構う素振りもせず、何事かを考え込むような顔をして、そのあとゆっくりと笑った。

そう、笑ったのだ。ひどく嬉しそうに。だが、ただ嬉しいのではない。仄暗い感情がその奥に揺らめいていて、それはそれは背筋が凍るほどに恐ろしい笑みだったのだ。

遣り手は驚いて、思わず動きを止めた。若旦那は朗らかに、周りもつられてつい顔が綻んでしまうような、穏やかな笑い方をしていることが多い。父の手引きでこの世に連れられてきてから随分と長い付き合いだけれど、嫌なことがあっても、苛立たしいことがあっても、その笑みが変わるのを見たことがない。

だから、今の恐ろしい笑みは見たことがなかった。

「ふふ……。そうでしたか……」

若旦那は何事かを呟いて、小さく笑っていた。

「なるほどねエ。大体の絵が見えてきましたよ」

「……わか、だんな……？」

昏い目をしてブツブツと喋る若旦那が信じられなくて、お駒が、恐る恐る確かめるように呼ぶ。そんなお駒の狼狽した姿がおかしかったのかも知れない。

「言ったでしょう？ 私は金壺眼だと。欲しいものは必ず手に入れるよ」
若旦那はにこりと笑った。が、その笑顔はまだ恐ろしかった。

—
了

超エアブー 20230505

寝床屋の無料配布

2023/05/05 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

少し前に、Twitter に上げた無料配布の続きの話です。
この後を含めた話を夏ごろにでも出せたらいいなと
思っております。

色々まだ調べないといけないことがあるので、
さて、今考えてる通りに行くかどうか。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんとかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。